

クスコ・ケチュア語における名詞化節の脱従属節化

蝦 名 大 助
(神戸夙川学院大学)

Insubordination of nominalized clauses in Cusco Quechua

Ebina Daisuke
Kobe Shukugawa Gakuin University

In some cases of Cusco Quechua, the originally subordinate (nominalized) clauses are reanalyzed as main clauses—the so-called insubordination (Evans 2007). In some cases, when insubordination occurs, the verb inflection of the originally nominalized verbs is no longer that of nominalized verbs, but shows features of finite verbs. Original nominalizers are reanalyzed as tense markers and/or person markers. In accordance with this change, other grammatical characteristics of the nominalized clauses are also lost, and they show features of finite clauses. Thus, the important aspect of insubordination in Cusco Quechua is that the structure of the clause may change drastically to the extent that it shows the grammatical characteristics of a finite clause, while original nominalizers can still be found in the predicate verb.

キーワード：クスコ・ケチュア語，名詞化，脱従属節化，定・不定，文法化

Keywords: Cusco Quechua, nominalization, insubordination, finite and non-finite, grammaticalization

1. はじめに
2. 節の種類と構造
3. 4つの名詞化節の脱従属節化
4. 脱従属節化に伴う文法化
5. まとめ

1. はじめに

クスコ・ケチュア語では、本来は従属節中のみに現れるはずの動詞形が、主節にも現れる、という現象が見られる。

- (1) [Juan-pa papa mikhu-sqa-ŋ-ta] yacha-ŋki=chu.
PSN-GEN potato eat-REAL.NMLZ-3-ACC know-2=INTER
‘Do you know that Juan ate potato?’

(1)で、従属節 Juan-pa papa mikhu-sqa-ŋ-ta「フアンがじゃがいもを食べたことを」は、主節の動詞 yacha-ŋki=chu「知っているか(2人称単数)」の補語である。ここで、従属節中に現れる動詞 mikhu-sqa-ŋ「食べたこと(3人称)」は、動詞語幹 mikhu-「食べる」に名詞化接尾辞 -sqa¹が付くことによって名詞化(nominalization)され、格接尾辞 -ta(対格)が付くことが可能になっている。(1)に見られるように、従属節が主節の動詞の補語である場合には、従属節の動詞は名詞化されていなければならない。

一方で、同じ形の動詞が、主節の述語動詞として働く場合がある。

(2) Juan	papa-ta	mikhu-sqa.
PSN	potato-ACC	eat-PHS.3

‘(They say that) Juan ate potato.’

(2)の述語動詞 mikhu-sqa「食べた」において、-sqaは(1)に現れる名詞化接尾辞 -sqaと同形であるが、ここでは主節の述語動詞に現れ、伝聞過去を表わしている。すなわち(2)は、主節でありながら従属節としての特徴も持っているといえる。

本稿では、Evans (2007)に従い、このような現象を「脱従属節化(insubordination)」と呼ぶことにする。すなわち、形の上では従属節に見えるが、主節としての用法が定着している場合、そのような従属節は脱従属節化している²。なお、「形の上では従属節」(formally subordinate clauses)と言う場合、動詞の活用(不定詞や分詞、接続法(subjunctive)の活用)や語順、補文標識(complementizer)などによって従属節の特徴を持っていることが分かるとされるが(Evans 2007: 370)、クスコ・ケチュア語においては、動詞形によって判断することにする。すなわち、(2)において、mikhu-sqa「食べた」は形の上では名詞化されており、本来は(1)のように従属節中に現れるべき形である。この点で、形の上で従属節の特徴を持っているが主節としての用法が定着しているため、脱従属節化している、と見る。

上で、「本来は従属節中に現れるはずの動詞形」と述べた。しかし、Evans (2007: 367)も指摘するように、従属節の特徴といってもそれはもはや従属節のみに限られるわけではない(those features will no longer be restricted to subordinate clauses)。そのため、Evans 同様にここでの従属節(の特徴)とは、「歴史的に従属節としての起源を持つ(‘having diachronic origins as a subordinate clause’)」という意味で用いる。

従属節化とはどのような過程を経て起こるのだろうか。(Evans 2007: 370-)は次のような過程を経て起こると説明している。

¹ なおここで、名詞化接尾辞 -sqaは動詞語幹が表す行為が主節の動詞yacha-「知る」の実現時((1)では発話時)において既に実現している(realis)ことを表す。

² “... the conventionalized main clause use of what, on prima facie grounds, appear to be formally subordinate clauses...” (Evans 2007: 367)

Subordination → Ellipsis → Conventionalized ellipsis → Reanalysis as main clause structure

まず初めに、主節が明示的に示された完全な構文がある。次に、その主節が省略される。次に、省略が慣習化する。最後に本来の従属節が主節として再解釈される、という過程である。

- (3) [Ich zweifl-e,] Ob wir richtig sind?
 I doubt-1SG if we right are
 ‘(I doubt), whether we are right?’ (Evans 2007: 372, 元の引用先は Buscha 1976)

- (4) [Es wäre shchön,] /Wenn ich deine Statur hätte
 it be.3SG.SBJV lovely if I your build had
 ‘[It would be lovely] / if I had your build.’ (Evans 2007: 373)

(3)や(4)では、文頭にある主節が省略され、本来は従属節であった節が主節として再解釈される、と考えられている。なお、ここでいう省略とは、「文法的に容認される、何らかの復元できる要素(some recoverable elements that are grammatically acceptable)」(Evans 2007: 370)ということであり、復元される要素は唯一に決まるわけではない(allows a range of situations from uniquely recoverable to non-uniquely recoverable)。

これを、クスコ・ケチュア語の脱従属節化にあてはめて考えると、例えば(1)で見た -sqa 節の場合、次のような過程を経ていると想定される。

- (5) [Juan-pa papa mikhu-sqa-ŋ-ta] uyari-ŋki=chu.
 PSN-GEN potato eat-REAL.NMLZ-3-ACC hear-2=INTER
 ‘Do/did you hear that Juan ate potato?’

- (6) Juan-pa papa mikhu-sqa-ŋ.
 PSN-GEN potato eat-REAL.NMLZ-3
 ‘(that) Juan ate potato.’

- (7) Juan papa-ta mikhu-sqa.
 PSN potato-ACC eat-PHS.3
 ‘(They say that) Juan ate potato.’

(5)では現れていた主節が(6)のように省略³され、それが慣習化して、脱従属節化が起こると考えられる。しかしそれだけではない。実は、従属節が主節として再解釈される過程において、Evans (2007) が挙げる例との重要な違いが見られる。それは、従属節に見られる文法的な特徴のほとんどが失われ、主節のそれになる（ことがある）点である。すなわち、(6)はそのままではあくまで従属節であり、(7)のように、名詞句の格標示が主節のそれになっていなければ、主節として用いることができない。具体的には次のような変化が起こる。

(5)や(6)では主語名詞句 Juan が属格で現れていた。一方、脱従属節化が起こった(7)ではゼロ格で現れる。また対象名詞句 papa は(5)や(6)ではゼロ格で現れていた。一方、脱従属節化が起こった(7)では対格で現れる⁴。すなわち、Evans (2007) が指摘する主節の省略と慣習化という過程に加えて、クスコ・ケチュア語では、従属節に見られる文法的特徴が主節のそれになってしまう、という変化も起こるわけである。Evans (2007)では、筆者の見る限り、このクスコ・ケチュア語のような変化は見当たらない。しかし、(7)のように、従属節としての特徴をほとんどとどめていないものについても、従属節起源である点については変わらないわけであるから、脱従属節化として認めるべきであると考ええる。

ここで「省略」についてもう一度考えておく必要がある。実は、(7)のような「脱従属節化」が起こる前の段階として、具体的にどのような主節の省略があったのか、クスコ・ケチュア語においては必ずしも明らかではない場合がある。Evans (2007)においても必ずしもすべての例文で主節が示されているわけではなく、「脱従属節化した」節のみが示されている場合もあるので、「省略」が具体的に何を指しているのか、必ずしも明確であるとは言えないが、省略の過程が明らかでないものについては、脱従属節化には含めるべきではない、という主張も成り立つかもしれない。しかし、どのような現象が脱従属節化に含められるべきか、まだ一般言語的な合意が完全になされたとは言えないであろう。本稿で述べる現象は、従属節起源のものが主節として定着した、と言えそうなものであるため、脱従属節化として扱うことにする。

本稿では、クスコ・ケチュア語における4種類の名詞化節の脱従属節化について見た上で、脱従属節化に伴う文法的な変化として、主節の省略だけでなく、従属節の内部の形態統語的性質の変化も含めることを提案する。その上で、なぜクスコ・ケチュア語でそのような変化が起こったか、その要因を考察する。また、関連して、統語的表現から形態的表現への文法化が起こる場合があることを示す。

³ Evans (2007)に従い、「省略(ellipsis)」とは、「文法的に容認される、何らかの復元できる要素(some recoverable elements that are grammatically acceptable)」という意味で用いる。すなわち、(7)のような脱従属節化が起こる前の「元の文」の主節として、必ずしもuyari-nki=chu「君は聞いたか」という語句が復元される必要はない。名詞化節を補語としてとるような何らかの主節があったであろう、ということである。

⁴ もう一つ、動詞における人称標示のされ方も変化しているが、この点については後で見ることにする。

2. 節の種類と構造

クスコ・ケチュア語では、主節の動詞は典型的には⁵定形動詞(finite verb)で現れ、従属節の動詞は非定形動詞(non-finite verb)で現れる。非定形動詞は、動詞の名詞化形(nominalized verb)と副詞化形(adverbialized verb)とに分けることができる。動詞の名詞化形とは動詞語幹に名詞化接尾辞が付いた形のことであり、動詞の副詞化形とは動詞語幹に副詞化接尾辞がついた形のことである。以下ではそれぞれを略して「名詞化形」「副詞化形」と呼ぶことにする。maqa-「殴る」という動詞語幹から作られる定形動詞と名詞化形、副詞化形の例を以下に挙げる。

- (8) maqa-ŋ (eat-3) 「彼(女)は殴る(った)」
 (9) maqa-sqa (eat-REAL.NMLZ) 「殴ったこと」「殴られたもの」
 (10) maqa-spa (eat-SS.ADV LZ) 「殴って」「殴りながら」

(8)は定形動詞の例であり、動詞語幹に3人称(主語)を表す接尾辞が付いている。(9)は名詞化形の例であり、動詞語幹に「既実現」を表す名詞化接尾辞 -sqa が付いている。「殴ったこと」という事態や、「殴られたもの」という存在物を表す。(10)は副詞化形の例であり、動詞語幹に同一主語の副詞化接尾辞 -spa が付いている。継起的あるいは同時の意味を表す。

述語動詞が3種類の動詞形のどれであるかにより節を分類することができる。それぞれを定形節(finite clause)、名詞化節(nominalized clause)、副詞化節(adverbialized clause)と呼ぶことにする。本稿では副詞化節の脱従属節化は扱わないため⁶、以下では名詞化節と定形節に見られる形態統語的な違いについて述べる。

名詞化節と定形節とでは、述語動詞の活用と補語の格標示の2点において、形態統語的な違いが見られる。

- (11) a. [qaŋ-pa papa mikhu-sqa-yki-ta] yacha-ni.
 2SG-GEN potato eat-REAL.NMLZ-2-ACC know-1
 ‘I know that you ate potato.’
 b. qaŋ papa-ta mikhu-ŋki.
 2SG potato-ACC eat-2
 ‘You eat/ate potato.’

⁵ 「典型的には」というのは、本稿で述べるような脱従属節化が見られるからである。脱従属節化を除けば、主節の動詞は常に定形動詞である。

⁶ 副詞化節については脱従属節化と呼べそうな現象が見つかっていないためである。

(11a)は名詞化節が現れる例であり、(11b)は定形節の例である。(11a)の名詞化節と(11b)は、いずれも主語が2人称単数 *qan* で、対象名詞句として *papa* 「じゃがいも」が現れている。しかし名詞化節(11a)では主語名詞句は属格で現れているのに対し、定形節(11b)ではゼロ格で現れている。また対象名詞句は(11a)ではゼロ格で現れているのに対し、(11b)ではゼロ格で現れている。一方、述語動詞のほうに目を移すと、(11a)では2人称主語を標示する接尾辞は *-yki* という形であるが、(11b)では *-ŋki* である。このように、名詞化節と定形節とでは、主語名詞句と対象名詞句の格標示、および述語動詞の活用が異なる⁷。

1章では、議論を簡単にするため、クスコ・ケチュア語の脱従属節化では従属節が主節としての形態統語的特徴を持つようになる（ことがある）、と述べた。しかしより正確に述べれば、名詞化節が脱従属節化することにより、定形節としての形態統語的特徴を持つ（ことがある）、ということである。3章では具体的な例を見ていくことにする。

3. 4つの名詞化節の脱従属節化

クスコ・ケチュア語には動詞を名詞化する接尾辞に、*-sqa*, *-na*, *-y*, *-q* がある。それぞれの名詞化形の例を以下に挙げる。

- (12) *mikhu-sqa* 「食べたということ」（既実現）
- (13) *mikhu-na* 「食べることになっているということ」（未実現）
- (14) *mikhu-y* 「食べること」（不定詞）
- (15) *mikhu-q* 「食べる者」（行為者）

-sqa 形は行為が既に実現していることを表す（既実現）。*-na* 形は未だ実現していない行為を表す（未実現）。*-y* 形は不定詞である。*-q* 形は行為者を表す。これら4つの名詞化形が作る節それぞれについて、脱従属節化と考えられる例が見つかる。すでに1章で見たように、名詞化節が脱従属節化すると、本来の名詞化節とは異なる形態統語的特徴を示すようになることがある。本章では4種類の名詞化節の脱従属節化について、脱従属節化する前と後とを比べ、それぞれどのような形態統語的特徴を示すようになるかを見ていくことにする。また、どのような過程を経て脱従属節化が起こったと考えられるのかについても見ていくことにする。

⁷ 補語の格標示についてより正確に述べると、以下ようになる。主語名詞句は、定形節中では常にゼロ格で現れるが、名詞化節中では属格で現れてもゼロ格で現れてもよい（属格が好まれる）。一方対象名詞句は、定形節中では常に対格で現れるが、名詞化節中ではゼロ格で現れても対格で現れてもよい（ゼロ格が好まれる）。しかし本稿では名詞化節中での補語の現れ方は、主語名詞句が属格、対象名詞句が対格で代表させておく。本稿での議論には影響しないからである。なお、さらに正確に述べるならば、名詞化節中の格標示には語順も関わっているのであるが、本稿の議論には影響しないのでここでは述べない。詳しくは蝦名（2007）を参照のこと。

-sqa 節は、これまで見てきたように主節の動詞が表す行為の実現時よりも前に事態が実現していることを表す。

- (16) [qaŋ-pa papa mikhu-sqa-yki-ta] yacha-ni.
 2SG-GEN potato eat-REAL.NMLZ-2-ACC know-1
 ‘I know that you ate potato.’

(16)は、「あなたがじゃがいもを食べたことを私は知っている。」という意味を表す。-sqa 節が脱従属節化すると、伝聞過去を表すようになる。

- (17) qaŋ papa-ta mikhu-sqa-ŋki.
 2SG potato-ACC eat-PHS-2
 ‘(They say that) you ate potato.’

(17)は、「あなたがじゃがいもを食べた」という事態を、話者が直接経験しておらず、間接的に知ったことを表している。(16)から(17)への過程では、主節の省略に加え、以下の文法的変化が起こっている。

(a) 主語の格標示：(16)の名詞化節では主語が属格で現れている。一方、脱従属節化すると、ゼロ格で現れる。これは、定形節と同じ振る舞いである。

(b) 対象名詞句の格標示：(16)の名詞化節では対象名詞句がゼロ格で現れている。一方、脱従属節化すると対格で現れる。これは、定形節と同じ振る舞いである。

(c) 動詞における主語の人称標示：(16)と(17)では、人称接尾辞の形が異なる。

(16)における -yki は名詞化形に付く形（2 人称）であり⁸、(17)の人称接尾辞は定形動詞に付く形（2 人称）である。すなわち、脱従属節化することによって、動詞は非定形動詞の活用ではなく、定形動詞の活用をするようになる。脱従属節化に伴う名詞化形のこのような活用の変化を、本稿では「定形動詞化」と呼ぶことにする。

以上見たように、-sqa 節が脱従属節化すると、その節は、述語動詞に名詞化接尾辞-sqa に由来する接尾辞が付いている以外の点では、定形節と同じ文法的振る舞いを示すようになる。

-sqa 節の脱従属節化については、実際の過程がどのようなものであったかが、筆者の知る限りでは資料などから明らかではない。1つの可能性として、次のようなコピュラ動詞の省略が考えられる。

⁸ 本稿の議論には関わらないが、副詞化形にも名詞化形と同じ人称接尾辞が付く。

- (18) alqu=qa wañu-sqa ka-sha-ŋ.
 dog=TOP die-REAL.NMLZ be-PROG-3
 ‘Dog is dead.’

(18)は、「犬が死んでいる（死んだ状態にある）」という意味を表す。話者が「犬」を目にした際には、既に犬は死んでいる。実際の死ぬ過程は見ておらず、結果から死んだことが分かる。そこから、直接経験ではない過去（すなわち本稿でいう「伝聞過去」）という解釈が出てきて、コピュラ動詞の省略とともに、「伝聞過去」という意味が定着する、ということが考えられる⁹¹⁰。

いずれにせよ、クスコ以外のケチュア語においても -sqa に対応する形式が名詞化接尾辞としても過去を表す接尾辞としても用いられる例が見られる (Coombs et al. 1976 など) ことや、脱従属節化に伴い伝聞（より正確に言えば直接経験ではない）を表すようになる例が Evans (2007: 394-400)にも挙げられている¹¹ことから、伝聞過去を表す -sqa が名詞化接尾辞 -sqa に由来することは間違いないと考えられる。

次に -na 節の例を挙げる。-na 節は -sqa 節とは反対に、主節の動詞が表す行為の実現時よりも後に、事態が実現することを表す。

- (19) [qaŋ-pa llaŋk’a-na-yki-ta] yacha-ni.
 2SG-GEN work-IRREAL.NMLZ-2-ACC know-1
 ‘I know that you are going to work/you are to work.’

(19)における -na 節の解釈には、義務（「君が働かなければならない」）・勧告的 (hortative)（「君が働くべきだ」）・未来の予定（「君が働くことになっている」）などがあるが、いずれにおいても、主節の動詞が表す行為（「私は知っている」）よりも後に、事態が実現する、という点では共通している。

-na 節がコピュラ動詞 ka-の補語として現れた場合、勧告的あるいは「義務」と解釈されることがある。

⁹ Weber (1989) では似たような現象として、-sqaに対応する -shqa がコピュラ動詞ka- と融合 (collapse) して -shka という完了を表す接尾辞になったと述べられている。

¹⁰ Evans (2007: 384-385) では、主節のコピュラが消えて名詞化形が主節の述語動詞になった形を扱わない、と述べられているが、その理由は明確にされていない。推察するに、コピュラ動詞が名詞化形を補語としてとっているだけであり、従属「節」とは認めがたい、ということかもしれない。確かに、(18)のような例はコピュラ動詞の補語が従属「節」であるとは認めがたいかもしれない。しかし省略がどのようなものであったのか、はっきりしているわけではないので、本稿では -sqa節の例も脱従属節化として扱っておくことにする。なお、後述する -na節や -q節の脱従属節化においてもコピュラ動詞の省略が見られるが、これらの場合には明らかに従属「節」と言える。

¹¹ 例えばラトビア語について、‘the active past participle can be used to describe situations whose authenticity is not vouchsafed by the speaker’ (p.396) と述べられている。

- (20) llaŋk'a-na-yki ka(-sha)-ŋ.
 work-HORT-2 be(-PROG)-3
 'You ought to/have to work..' (lit. 'There is a thing that you have to do.')

(20)は、文字通りには「あなたが働く(べき)ことがある」という意味を表すが、そこから「あなたは働くべきだ」「あなたは働かなければならない」という勧告的、あるいは「義務」を表しているという解釈が生じる。そして、ここでコピュラ動詞が省略されて -na 節が脱従属節化すると、もっぱら勧告的(hortative)な意味あるいは義務を表すようになる。

- (21) llaŋk'a-na-yki.
 work-HORT-2
 'You ought to/have to work.' (脱従属節化の場合の解釈)

(21)は「あなたは働くべきだ／働かなければならない」という意味を表す。(21)が本来の -na 節だとすれば、「あなたが働くべきこと」「あなたの仕事」という解釈になるが、ここでは意味の変化が起こっており(「べき」「はずだ」というモダリティが表されている)、脱従属節化していると考えられる。

しかし -na 節は -sqa 節とは異なり名詞化節としての文法的性質を残している。それは、主語の人称を標示する接尾辞が名詞化形に付くものであることから分かる。この点で、-sqa 節と大きく異なる。

次に -y 節の例を挙げる。-y 形はいわゆる不定詞としての用法を持つ。

- (22) Juan [papa mikhu-y-ta] muna-ŋ.
 PSN potato eat-INF.NMLZ-ACC want-3
 'Juan wants to eat potato.'

(22)は、muna-「～したい」の補語として -y 節が現れている。このように、-y 節は、「～したい」「始める」「終える」などの補語となる節の動詞として現れる。

-y 節が脱従属節化すると、2 人称に対する命令を表すようになる。

- (23) papa-ta mikhu-y.
 potato-ACC eat-IMP.2
 'Eat potato!' (for 2nd person singular)

(23)は「じゃがいもを食べろ」という2人称単数に対する命令を表す。-y 節が脱従属節化すると、-sqa 節同様に、名詞化節としての文法的性質は失われ、定形節としての性質を示すようになる。それは以下の点から明らかである。

(a) 対象名詞句の格標示：脱従属節化する前にはゼロ格で現れていたが(22)、脱従属節化すると対格で現れるようになる(23)。

(b) 動詞の活用：定形動詞としての活用を示すようになる。

動詞の活用については説明が必要である。(23)は一見すると、動詞の活用においては名詞化形としての性質を残しているように見えるかもしれない。しかしそうではなく、定形動詞としての活用を示すようになっていると考えたほうがよい。それは次のような例が見られるからである。

- (24) papa-ta mikhu-y-chis.
 potato-ACC eat-IMP.2-[+2]
 ‘Eat potato!’ (2人称複数に対する命令)

(24)は2人称複数に対する命令の例である。動詞に複数を表す接尾辞 -chis¹²が付いているが、-chis はあらかじめ動詞語幹に主語人称接尾辞が付いていないと付くことができない。(23)や(24)では、本来は名詞化接尾辞であった -y が主語の人称マーカー (2人称) と再解釈されていると考えられる。名詞化接尾辞 -y が定形動詞に現れることはなく、また、接尾辞 -chis が名詞化接尾辞 -y の直後に付くことはないからである。以上から、(23)や(24)では元々は名詞化形であった動詞が共時的には定形動詞化しているとするのが妥当である。名詞化形のままであるとすれば、たとえば、「じゃがいもを食べること！」のように、不定人称命令の用法があっても良さそうであるが、実際には(23)は必ず2人称単数に対する命令であり、(24)は常に2人称複数に対する命令である。また、対象名詞句の現れ方も、(23)や(24)では定形節の場合と同様であり、常に対格で現れる。すなわち、伝聞過去を表す -sqa 節の場合と同様に、命令を表す -y 節も、もはや名詞化節としてではなく定形節としての形態統語的特徴を示すようになっている。

クスコ・ケチュア語において、-y 節の脱従属節化がどのように起こったかは不明である。たとえば以下のように、-y 節がコピュラ動詞の補語として現れ、そこからコピュラ動詞が省略されたという過程が想定できるかもしれない。

- (25) [papa mikhu-y] ka(-sha)-ŋ.
 potato eat-INF.NMLZ be(-PROG)-3
 ‘There is potato-eating.’ (?)

¹² 正確に言えば、-chisは複数接尾辞ではなく付加人称 (2人称) を表す接尾辞である。クスコ・ケチュア語における複数標示について、詳しくはEbina (1998)などを参照。

しかし共時的には(25)のような例は見つかっていない。-y 節の脱従属節化に際し、主節の省略がどのように起こったのか、はっきりしたことは分らない。ただし、不定詞が単独で用いられるようになり命令を表すことは、Evans (2007: 391) にも指摘されているように、他言語においてもよく見られる現象であり、また、ケチュア諸語では、同形の接尾辞が不定詞を作る接尾辞としても、命令を表す接尾辞としても用いられる例が広く見られる (Weber 1989 など) ことから、命令を表す -y が名詞化接尾辞 -y に由来する可能性は高いと考えられる。

最後に、-q 節についてである。(26)に見られる名詞化接尾辞 -q は、動詞語幹に付き行為者名詞を作る接尾辞である。(26)は一見すると名詞化「節」ではなく名詞句に見えるかもしれない。しかしクスコ・ケチュア語では、(26)を名詞句ではなく名詞化節として扱うべき統語的根拠がある。

- (26) pay=qa [waka michi-q].
 3SG=TOP cow whack-AGT.NMLZ
 ‘S/he is a person who whacks cows.’ (名詞化形としての解釈)

ここでは詳細は述べないが、その根拠は、名詞句中には現れえない名詞句 (様々な格形の名詞句) が、-q 形の補語として-q 節中に現れうる、ということである (詳細については、例えば蝦名(2007: 91)を参照)。

-q 節が脱従属節化すると、過去の習慣を表すようになる。

- (27) pay=qa waka-ta michi-q.
 3SG=TOP cow-ACC whack-PHB.3
 ‘S/he used to whack cows.’ (脱従属節化の場合の解釈)

これには、次のような主節の省略が起こっていると考えられる。

- (28) pay=qa [waka michi-q] ka-ra-ŋ.
 3SG=TOP cow whack-AGT.NMLZ be-PAST-3
 ‘S/he was the one who whacked cows.’

(28)では pay=qa「彼(女)は」が主語であり、コピュラ動詞 ka-ra-ŋ が述語動詞、waka michi-q が動詞の補語である。ここでコピュラ動詞が省略されると (そして名詞化節中の対象名詞句に対格接尾辞が付くと)、(27)になる。行為者名詞とは、習慣的にその行為を行なう存在であるから、行為者名詞が習慣を表すようになるという意味の変化は起こっても不思議ではないと考えられる。

-q 節が脱従属節化すると、以下の点において定形節としての文法的特徴を示すことがある。

(a) 対象名詞句の格標示：上の例から明らかであるように、脱従属節化する前にはゼロ格で現れていたものが、脱従属節化すると対格で現れるようになる。

(b) 動詞の活用：-y 節と同様の例が見つかることから、定形動詞の活用を示すようになっていると考えることができる。その例とは、動詞における複数標示である。

- (29) waka-ta michi-q-ku.
 cow-ACC whack-PHB.3-[+3]
 ‘They used to whack cows.’

(29)では、動詞に複数を表す接尾辞 -ku¹³が付いているが、-ku はあらかじめ動詞語幹に人称接尾辞が付いていないと付くことができない。本来名詞化接尾辞 -q に接尾辞 -ku が直接後続することはない。よって、(29)では本来は名詞化接尾辞であった-q が、主語の人称（3 人称）と時制（伝聞過去）を表す接尾辞と再解釈されていると考えられる。また、名詞化接尾辞 -q は本来決して定形動詞には現れない。(27)や(29)は共時的には定形動詞化していると考えられる。また、対象名詞句も常に対格で現れなければならない。すなわち、(27)や(29)は、定形節としての形態統語的特徴を示すようになっている。

しかし、-q 節の場合、-sqa 節や -y 節の脱従属節化とは異なり、名詞化節としての形態統語的特徴が保持されたままの場合もある。

- (30) a. waka-ta michi-q-ku. (= (29))
 cow-ACC whack-PHB.3-[+3]
 ‘They used to whack cows.’
 b. waka michi-q ka-ŋ-ku.
 cow whack-PHB be-3-[+3]
 ‘They used to whack cows.’（「過去の習慣」の解釈）

(30a)は、名詞句の格標示においても、動詞における人称標示においても、定形節の場合と同様の振る舞いを示している。しかし、全く意味を変えずに、(30b)のように言うことも可能である。(30b)は、全体が1つの構文を形成していると言え¹⁴、-q 形ではなくコピュラ動詞のほうで人称が標示されている。ここで、-q 形

¹³ ここでも、正確に言えば、-kuは複数接尾辞ではなく付加人称（3人称）を表す接尾辞である。

¹⁴ (30b)を1つの構文と見ることができる根拠は、(a)全体の意味が個々の要素の意味の和ではない点（「現在の習慣」ではなく「過去の習慣」を表す）と、-q形とコピュラ動詞ka- とのあいだに他の要素が割って入る

における人称標示は名詞化形式的な振る舞いを示している。なぜなら、(30b)の -q 形では人称が標示されていない。名詞化形では人称が標示されることがあるのに対し、定形動詞であれば必ず主語の人称が標示されなければならないからである。また、(30b)では対象名詞句の格標示も名詞化節と同様である。そして、(30a)のような定形節的な構文は主語が3人称の場合にしか見られず、1・2人称の場合には(30b)のような名詞化節的な構文のみが用いられる。(31)を参照されたい。

- (31) waka michi-q ka-ni.
 cow whack-PHB be-1
 ‘I used to whack cows.’ (「過去の習慣」の解釈)

(31)は主語が1人称の例である。主語人称接尾辞 -ni はコピュラ動詞 ka- に付いている。ここで、コピュラ動詞を省略して(31)のように -q 形のほうで人称を標示することはできない。

- (32) *waka michi-q-ni.
 cow whack-PHB-1

以上の例から、-q 節の場合、脱従属節化に伴って定形節としての形態統語的特徴を示すようになる場合とならない場合とが共存している、と言える¹⁵。

以上見てきたことをまとめると、次のようになる。まず、主節の省略という観点から見ると、-na 節と-q 節については、コピュラ動詞が現れる主節が省略されて脱従属節化が起こったと言えそうである。一方、-sqa 節と-y 節については、どのような主節の省略が起こったのか、はっきりしない。次に、脱従属節化した名詞化節の文法的特徴という観点から見ると、-na 節は従属節としての特徴をよくとどめているのに対し、-sqa 節と-y 節はとどめていない。-q 節は、中間的な段階を示している。

以上、4種類の脱従属節化について、従属節（名詞化節）の本来の意味と、脱従属節化した用法の意味、名詞化節としての文法的特徴（節内の名詞句の格標示と動詞の人称標示）が保持される度合い、からまとめると以下のようになる。

ことができない点である。Weber (1989: 109)にも似たような指摘がある。

¹⁵ (30b)や(31)では主節の述語動詞としてコピュラ動詞が現れているのだから、脱従属節化が起こっていない、と見るべきかもしれない。しかし、「過去の習慣」を表すこれらの例は、意味の点でも、1つの構文を成していると考えられる点でも、「行為者」を表す -q 節とは異なる。コピュラ動詞ka- は人称標示の機能だけを担っていると見ることも可能かもしれない。

表1: 4つの名詞化節の脱従属節化

元の 名詞化節	元の名詞化節 の意味	脱従属節化節 の意味	節内の名詞句 の格標示	人称標示
-sqa 節	既実現	伝聞過去	定形節的	定形動詞的
-na 節	未実現	義務	名詞化節的	非定形動詞的
-y 節	不定詞	命令	定形節的	定形動詞的
-q 節	行為者	過去の習慣	中間的	中間的

すでに述べたように、Evans (2007)に挙げられている例では、脱従属節化した節は形式的には元の従属節としての特徴を保持しているように思われる。一方、クスコ・ケチュア語では、脱従属節化した節には新たに定形節としての形式的特徴を持つようになっているものがある。ここで、名詞化節としての文法的特徴をよく保持しているものとほとんど失っているものの違いを、脱従属節化の程度の違いであると考え、4種類の脱従属節化によりその程度が異なることになる。すなわち、-sqa 節と -y 節が最も脱従属節化の程度が高く、-na 節が最も低い。そして、-q 節はその中間的な特徴を示す、とすることができる。

まず、-sqa 節について見ると、脱従属化が起こると、文法的振る舞いは定形節の場合と同じになる。すなわち、主語名詞句はゼロ格で現われ、対象名詞句は対格で現われるようになる。また動詞における人称標示は、定形動詞の場合と同じになる。

-na 節については、脱従属節化しても、名詞句の格標示や動詞における人称標示は変わらない。この点で、-na 節は Evans (2007) が挙げる例に最も近い。

-y 節が脱従属節化すると、-sqa 節同様、名詞句の格標示は定形節と同じになる。動詞における人称標示も定形動詞的になる。

最後に -q 節について述べると、脱従属節化が起こり、定形節と同じ振る舞いを示すようになる場合と、名詞化節と同じ振る舞いのままである場合とがある。その両者が共存している点が、他の脱従属節化とは異なる。

クスコ・ケチュア語の脱従属節化現象においては、名詞化節が主節として再解釈されるようになると、あわせて動詞が定形動詞化することがある。また、名詞句の格標示も定形節のそれになる。すなわち、単に従属節の主節化が起こることではなく、非定形節(名詞化節)の定形節化が起こるのである。これは Evans (2007)の例には見当たらないようである。この点で、通言語的に興味深い例を示している、と言える。

4. 脱従属節化に伴う文法化¹⁶

本稿では Evans (2007:371-374) に従い、脱従属節化が、「明らかな主節を持つ完全な構文(Full construction with overt main clause)」がまずあり、「主節が省略(Ellipsis of main clause)」され、その「省略が慣習化(Convventionalization of ellipsis)」し、最後に主節がない「構文全体の慣習化(Conventionalization of the whole construction)」に至る、という過程を経て起こるものとしてクスコ・ケチュア語の例を提示した。ここでは、脱従属節化に伴い、クスコ・ケチュア語において主節の省略以外に起こる変化について、すでに少し述べたがあらためて検討する。

4.1. 動詞の定形化

これまで見てきたように、クスコ・ケチュア語では、脱従属節化が起これば、あわせて名詞化形の定形化が起こる場合がある。動詞が定形化することとは、名詞化接尾辞が、もはや名詞化接尾辞ではなく異なる範疇に属する接尾辞へと再解釈される、ということである。定形化が起こるか起こらないかには、クスコ・ケチュア語の文法体系の中で、意味的な条件や文法的な条件が関係しているようである。

クスコ・ケチュア語における動詞の形態論を見ると、名詞化接尾辞 *-sqa*, *-na*, *-y*, *-q* が現れる位置には、定形動詞の場合、時制（過去）を表す接尾辞が現れる。そのため、「伝聞過去」「過去の習慣」を表す *-sqa* と *-q* については、時制接尾辞と再解釈され、定形動詞と同じ人称標示（活用）を示すようになったと考えられる。一方で、モダリティを表す接尾辞は存在しないので、「義務」を表す *-na* については、定形動詞に現れる接尾辞との再解釈が起こらなかったと考えることができる。*-y* については、名詞化接尾辞や時制接尾辞の直後に現れる主語人称接尾辞への再解釈が起こったと考えることができる。

しかし、「伝聞過去」を表す *-sqa* については、完全に定形動詞化が起こったと考えられるのに、「過去の習慣」を表す *-q* については、非定形（名詞化形）のままと思われる場合が共存している。これは、*-q* 形に主語人称接尾辞が付いた場合、主語ではなく目的語の人称を標示することが原因だと考えられる。

- (33) *nuqa* *maqa-q-ni-y*
 1SG beat-AGT.NMLZ-LINK¹⁷-1
 ‘person who beats me’

¹⁶ 本稿では「文法化」を「再解釈(reanalysis)」を含む意味で用いる。

¹⁷ 子音連続を避けるために挿入される要素。

(33)において, *maqa*-「殴る」対象である *nuqa*「私」の人称は, 主語人称接尾辞 *-y* (1 人称) によって標示されている。このように, *-q* 形に主語人称接尾辞が付いた場合, 主語の人称ではなく目的語の人称を表すと解釈されるので, 脱従属節化が起こっても, 主語人称接尾辞を用いて主語の人称を表す, ということが起こらないのだと考えられる。そのため, *-q* 形については, 完全な定形動詞化は起こりにくいことが予想される。

以上をまとめると, 次のようになる。まず, 接尾辞 *-sqa* については, 脱従属節化に伴い, 名詞化接尾辞から時制接尾辞へという再解釈が起こった。これには, そもそも名詞化接尾辞が時制接尾辞と形態論的に同じ位置に現れることが関係している。次に *-y* については, 名詞化接尾辞から主語人称接尾辞 (命令) へという再解釈が起こった。これは, 主語人称接尾辞が名詞化接尾辞の直後に現れることが関係していると考えられる。*-na* については, そもそもクスコ・ケチュア語においてモダリティを表す接尾辞がなく, 名詞化接尾辞からモダリティ接尾辞へという再解釈は起こらなかった。そのために定形動詞化が起こらなかったと考えることができる。

また, 動詞の定形化 (名詞化接尾辞の再解釈) と, 主語名詞句や対象名詞句の格形の変化は常に同時に起こっている。動詞は定形化した名詞句の格形は名詞化節のそのままであるとか, 名詞句の格形は変化した名詞は定形化しない, ということはない。これは, 動詞の定形化に伴って格形が変化するのでと考えられる。格形の変化に伴って動詞が定形化するのではない。というのは, クスコ・ケチュア語では, 節中の名詞句の格形は, 動詞形が何であるかによって決まるのであって, その逆ではないからである。

- (34) Juan *papa-ta* *mikhu-ŋ*.
 PSN *potato-ACC* *eat-3*
 ‘Juan eats potato.’

- (35) Juan *papa-ta* *mikhu-ŋ*
 PSN *potato-ACC* *eat-DS.ADV LZ-3*
 ‘When Juan eats potato,’

- (36) Juan-pa *papa* *mikhu-sqa-ŋ*
 PSN-GEN *potato* *eat-REAL.NMLZ-3*
 ‘that Juan ate potato’

(34)は動詞が定形動詞, (35)は副詞化形, (36)は名詞化形の例である。述語動詞が副詞化形の場合, 名詞句の格形は述語動詞が定形動詞の場合と同じである。名

詞句の格形が決まれば述語動詞の動詞形が決まるとは言えないが、その反対に、述語動詞の動詞形が決まれば名詞句の格形が決まるということと言える。

以上をまとめると、クスコ・ケチュア語における脱従属節化においては、「主節の省略」「動詞の定形化」「名詞句の格形の変化」という3つの変化が（常にではないが）起こることになる。そして、名詞句の格形の変化は、動詞の定形化によって引き起こされると考えられる。

4.2. 統語的表現から形態的表現へ

3章で見たように、「過去の習慣」を表す *-q* については、構文全体と、単独の接尾辞それぞれが「過去の習慣」を表すと思われる用例が共存している。

- (37) a. *waka* *michi-q* *ka-ŋ-ku.*
 cow *whack-AGT.NMLZ* *be-3-[+3]*
 ‘They are cow-whackers.’ (「行為者」の解釈)

- b. *waka* *michi-q* *ka-ŋ-ku.*
 cow *whack-PHB* *be-3-[+3]*
 ‘They used to whack cows.’ (「過去の習慣」の解釈)

- c. *waka-ta* *michi-q-ku.*
 cow-ACC *whack-PHB.3-[+3]*
 ‘They used to whack cows.’

(37a)では、コピュラ動詞 *ka-* が主節の述語動詞として現れ、行為者を表す *-q* 節を補語としてとっている。そして「彼らは牛を追う者たちだ」という意味を表している。(37b)では、形の上では全く同じ文が「彼らは牛を追ったものだ」という過去の習慣を表すようになっていく。ここでは、「*-q* 節 *ka-* (コピュラ動詞)」という構文で「過去の習慣」が表されていると考えられる。すでに述べたように、個々の要素の意味を足しても「過去の習慣」という解釈にはならないし、また、*-q* 節とコピュラ動詞とのあいだに他の要素が割って入ることができないためである。そして(37c)では、もはやコピュラ動詞が現れなくなり、*-q* が「過去の習慣」と人称(3人称)を表すようになっていく。すなわち、主節の省略により、構文全体で表されていた意味が、接尾辞によって表されると再解釈されるようになった、と考えられる。すなわち、統語的構造から形態的構造へという文法化が起こったといえる。しかし、共時的には依然として(37b)のような統語的構造も共存し

ており、同じ意味を表すのに、統語的（迂言的）表現と形態的表現とが共存している、という状態になっている。

5. まとめ

クスコ・ケチュア語では、4つの名詞化節すべてにおいて脱従属節化が見られる。また、脱従属節化に伴い、動詞の名詞化形が定形動詞化する場合がある。それに伴って、名詞化節に見られた形態統語的特徴が失われ、定形節のそれになる。しかし定形節化の程度は4つの名詞化節によって異なる。4つの接尾辞はそもそもすべて同じ名詞化接尾辞という範疇に属するものであるのに、定形動詞の時制接尾辞や人称接尾辞として再解釈されるものもあれば、そうではないものもある。また、過去の習慣を表す -q のように、統語的構造から形態的構造への文法化が起こったと考えられるものもある。また、ここでは同じ意味を表すのに統語的表現と形態的表現とが共存している。

本稿で挙げた例では、脱従属節化において、具体的にどのように主節の省略が起こったか明らかではないものもあった。実際にどのような過程を経て脱従属節化が起こったのかについて、今後さらに検討を進めなければならないと考えている。

略号

ACC	対格(accusative)
ADVLZ	副詞化接尾辞(adverbializer)
AGT	行為者(agentive)
DS	非同一主語(different subject)
GEN	属格(genitive)
HORT	勧告的(hortative)
IMP	命令(imperative)
INF	不定詞(infinitive)
INTER	疑問(interrogative)
IRREAL	未実現(irrealis)
LINK	linker
NMLZ	名詞化接尾辞(nominalizer)
PAST	過去(past)
PHB	過去の習慣(past habitual)
PHS	伝聞過去(past hearsay)
PROG	進行相(progressive aspect)
PSN	人名(person name)
REAL	実現(realis)
SG	単数(singular)
SS	同一主語(same subject)

TOP 主題(topic)
+ 付加人称(additional person)

転写に用いる記号

子音

	labial	alveolar	postalveolar	palatal	velar	uvular	glottal
Voiceless Non-aspirated Stop	p[p]	t[t]	ch[tʃ]	k[k~x]		q[q~χ]	
Aspirated Stop	p ^h [p ^h ~ɸ]	t ^h [t ^h]	ch ^h [tʃ ^h]	k ^h [k ^h]		q ^h [q ^h ~χ]	
Ejective (Voiced Stop)	p' [p']	t' [t']	ch' [tʃ']	k' [k']		q' [q']	
Nasal	m[m]	n[n]	ñ[ñ]	ɲ[ɲ]			
Fricative		s[s~ʃ]	sh[ʃ]				h[h]
Tap		r[r]					
Lateral Approximant		l[l]	ll[ʎ]				
Approximant	w[w]				y[j]		

母音

	front	central	back
Close	i[i~e]		u[u~o]
Open		a[a~α]	

本研究のデータ

本研究のデータは、1996年と、98年、99年、2003年、05年、06年に筆者がペルー共和国クスコ県で行なった現地調査で得たものである。96年と98年の調査では三菱信託山室記念奨学財団の研究助成を受けた。同財団に深く感謝したい。06年の調査は、東京大学学術研究活動等奨励事業（海外）の研究助成により行なった。データは、1930年代生まれの男性（故人）、50年代生まれの男性、50年代生まれの女性からの聞き取り調査で得た。

参 考 文 献

- Coombs, David, Heidi Coombs and Robert Weber. 1976. *Gramática Quechua*: San Martin. Lima: Ministerio de Educación/Instituto de Estudios Peruanos.
- Ebina, Daisuke. 1998. *Verb Inflection in Cuzco Quechua*. Master Thesis. University of Tokyo.
- 蝦名大助. 2007. 「クスコ・ケチュア語」 中山俊秀・山越康裕（編）. 『文法を描く2—フィールドワークに基づく諸言語の文法スケッチ—』. 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所. pp. 63-97.
- Evans, Nicholas. 2007. "Insubordination and Its Uses". In Irina Nikolaeva *Finiteness: Theoretical and Empirical Foundations*. Oxford University Press. pp.366-431.
- Weber, David. 1989. *A Grammar of Huallaga (Huánuco) Quechua*. University of California Press.